児童の屋外遊び時間を規定する要因の検討 — 大阪府下5, 6年児童の経年比較を中心に —

丹 羽 劭 昭 (奈良女子大学)
高 橋 健 夫 (奈良教育大学)
入 口 豊 (大阪教育大学)
長 沢 邦 子 (奈良女子大学：非常勤)

The examination of the factors influencing the time for outdoor play in children

Takaaki NIWA¹
Takeo TAKAHASHI²
Yutaka IRIGUCHI³
Kuniko NAGASAWA¹

The annual change of the time for outdoor play of elementary school children (the 5th and 6th grades) was analyzed, and also the factors influencing it were investigated. The surveys (questionnaires) were carried out 4 times for 11 years (1971, 1973, 1980, 1981). Total subjects in number were about 4,000 elementary school children of the 5th and 6th grades in Osaka Prefecture. Outstanding findings are as follows.

- 1) The time for outdoor play of elementary school children had been gradually decreasing during 11 years from 1971 to 1981.
- 2) Boys have been likely to play longer outdoors than girls.
- 3) Differences in outdoor playtime among the residential areas depend strongly on such factors as the time, the space, and the group.
- 4) There was a big gap between the actual playtime enjoyed by children and the time desired. This gap (about 2 hours) suggested that there exist several limitations to reduce their playtime.
- 5) The length of the time for outdoor play, indoor play, and T.V. watching have approximately the same tendency; the time for playing outdoors and for T.V. watching increased with increase of the time for playing outdoors.
- 6) The percentage of the children attending the "Juku" (cram schools for junior high school entrance examinations and other schools for skill subjects) have reached 80 percent. Such an increasing number of the participants is the main factor of reducing the total length of playtime (outdoor play, indoor play, and T.V. watching). In fact, outdoor playtime of the attendants of the Juku was remarkably less than that of non-attendants.
- 7) The larger the number of play group is, the longer the outdoor playtime gets.
- 8) We consider that the children who do not want to play outdoors are produced by 1) such exter-

nal limiting factors as “study”, “playmates”, and “playground”, and 2) the internal factor (the tendency to avoid outdoor play) in which the interaction of the external limiting factors resulted.

9) It was recognized that the participation in the Juku, the play group, and the subjective attitude to play were certain robust limiting factors to the time for outdoor play of children.

1. Nara women's University, Faculty of Letters, Kitaouya-nishimachi, Nara City (630)
2. Nara University of Education, Faculty of Education, Takabatake, Nara City (630)
3. Osaka University of Education, Faculty of Education, Jonan, Ikeda City (563)

序 論

今日、社会的変化に伴う子どもの屋外遊びの欠損化が重要な問題となっており、この事実を明らかにするため従来数多くの児童の遊びに関する実態調査が報告されてきた。

例えば、都市化による遊び場の減少を危惧して、遊び場の実態や児童公園のあり方を検討したもの⁸⁾⁹⁾、大都市の子どもの遊び空間の問題点を総合的に扱ったもの¹⁾³⁾、時間的な視点から子どもの生活時間と遊びの関わりを検討したもの⁵⁾、さらに子どもの遊びの実態を、時間、空間、仲間などの諸条件との関連で総合的に明らかにしようとしたもの²⁾⁴⁾¹⁸⁾、その他、子どもの生活時間調査の一部として遊びの問題を扱ったもの¹⁰⁾¹⁶⁾¹⁷⁾¹⁹⁾など数多く報告されている。

しかし、それらの調査研究は、調査の実施時期(季節)、地域、対象年齢が異なるため、これをもとに、児童の遊びの変化を経年的に比較したり、現在の児童の屋外遊びの欠損化を客観的に証明することは困難である。一方、近年の急激な社会変化とこれに伴う児童の生活の変化が、児童の屋外遊びの様々な側面に否定的に強く作用していることは容易に予想できることである。屋外遊びが減少する状況は、子どもの健康・体力の維持・増進や望ましいパーソナリティ形成など、運動と関わって望ましい発育・発達を願う教育の立場から、子どもの現在のみならず将来を考える時、極めて重要な問題である。そこでは特に次のようなことがらが課題になる。

1) 児童の屋外遊びの実態の解明、2) 屋外遊びが及ぼす身体的・心理的・社会的発達への影

響、3) 児童の活発な屋外遊びを保障する条件の解明である。しかし、児童の屋外遊びに焦点をあて、これらの課題を経年的に比較した実証的研究は見あたらない。

そこでわれわれは、まず現在の児童の屋外遊びの実態を明らかにし、ついで屋外遊びを保障する条件を見出す目的から、それらを規定している要因を明らかにするため、大阪府下5・6年児童を対象に昭和46年から56年にかけて4回にわたり調査を実施した。

児童の屋外遊びを規定すると考えられる直接的・間接的要因は多様かつ複雑であり、最終的には社会生活を営む上で必要とされるすべての条件が関与しているとも考えられる。しかし、これら全ての条件と屋外遊びとの関係を究明することは、極めて困難であるため、さし当りわれわれは、従来の研究¹²⁾²⁰⁾から児童の屋外遊びを成立させる直接的条件と考えられる4要因を設定し、考察の対象とした。すなわち、環境的要因として①児童の遊戯的・学習的生活の時間構造要因、②遊戯空間要因、③遊戯集団要因の3要因、主体的要因として④遊びに対する児童の態度や能力の要因である。これら4要因を特に設定した理由は、児童が屋外遊びを楽しむためには、何よりも「時間的余裕」「適当な遊び場」「遊び仲間」が不可欠な条件であり、しかも現代社会の諸変化は、これらの条件に対して否定的な影響を及ぼしていると考えたためである。さらに遊びは本来、個人の意欲や能力等の主体的条件に依存していると考えたためである。

これらの調査結果は、これまで、屋外遊戯時間⁶⁾⁷⁾や遊戯集団を規定する要因の検討、屋外遊び

とパーソナリティーとの関係¹³⁾として個別に報告してきた。さらに、それらの結果から、新たに子どもの遊びに対する親の態度も主要な要因として浮かんできた。そのため、親の態度要因を中心とした研究を静岡県において行い、児童の屋外遊びと母親の態度との関係¹⁴⁾¹⁵⁾として報告した。

これらの研究をふまえ、本研究では、昭和46, 48, 55, 56年の調査結果を比較しながら、まず、大阪府下の児童の屋外遊び時間の経年的変化を明らかにする。次に、屋外遊び時間を規定する要因として、時間、空間、仲間、主体の4要因を仮定し、屋外遊びに対するそれら4要因の影響について検討することを目的とする。

方 法

対象：大阪府下の典型的な農村・過密・住宅各地区に校区をもつ小学校の5・6年生を無作為抽出し、当該児童全員、各調査時共約1,200名、合計約5,000名が対象となっている。そのうち有効資料(全項目に回答しているもの)は4164名であった(表1)。

手続き：昭和46年は10月、48, 55, 56年は7月上旬に、各校の学級担任を通じて、「短縮授業や休日、半日でない通常の授業の日のそして雨天でない日の翌日」に、質問紙法(無記名)による遊びの調査を行った。

表1 対 象

昭和46年10月	地 域	農 村			過 密			団 地			住 宅			全 体							
	対象校数	3			2			2			1			8							
	人 数	男			84			186			129			130			529				
		女			83			155			140			93			471				
	計	167			341			269			223			1000							
昭和48年7月	地 域	農 村 部						都 市 部						全 体							
	対象校数	1						3						4							
	人 数	男						145						323			468				
		女						145						322						467	
	計	290						645						935							
昭和55年7月	地 域	農 村			過 密			住 宅			全 体										
	対象校数	12			10			15			37										
	学 年	5	6	計	5	6	計	5	6	計	5	6	計								
	人 数	男	72	82	154	98	109	207	134	139	273	304	330	634							
		女	86	83	169	91	88	179	151	170	321	328	341	669							
	計	158	165	323	189	197	386	285	309	594	632	671	1303								
昭和56年7月	地 域	農 村			過 密			住 宅			全 体										
	対象校数	1			1			1			3										
	学 年	5	6	計	5	6	計	5	6	計	5	6	計								
	人 数	男	64	51	115	105	105	210	76	87	163	245	243	488							
		女	47	50	97	101	98	199	79	63	142	227	211	438							
	計	111	101	212	206	203	409	155	150	305	488	438	926								

結果と考察

1. 屋外遊び時間の経年的比較

1) 曜日別、性別、塾等への参加・非参加別の比較

児童の屋外遊び時間の平均を図1～3に示す。

図1～3から、年々屋外遊び時間は減少傾向にあることがわかる。しかも男女共、平日のみでなく、土曜、日曜でも、また、塾やけいこごとに行っている日でも行っていない日でも、同様の傾向を示している。

図1. 屋外遊び時間の経年比較

注1. 昭和56年の土・日曜は調査していない。

- 塾・けいこごと参加者と非参加者の平均を示している。
- 塾・けいこごと参加者は、参加日と不参加日では屋外遊び時間が異なるので、両者を平均した。塾・けいこごと参加者の屋外遊び時間の計算法は次の通りである。

$$\text{屋外遊び時間} = \frac{(\text{塾けいこごとのある日の屋外遊び時間}) + (\text{塾けいこごとのない日の屋外遊び時間})}{2}$$

図2. 平日の塾のない日の屋外遊び時間の経年比較
(塾に通っている人も、通っていない人も含む)

図3. 平日の塾のある日の屋外遊び時間の経年比較
(塾参加者のみ)

対象の人数から考えると、年度による対象の違いを考慮しても、なお、大阪府下の5・6年児童の屋外遊び時間は徐々に減少していることが推定される。男女を比較すると、常に男子が女子より長く遊んでいる。

2) 地域別比較 (地域差の検討)

地域別にみた屋外遊び時間を図4に示す。図4から、昭和46年(10月調査)では地域差は明らかにみられた²⁰⁾が、昭和55年には地域差がほとんど見られなかった(有意差なし、なお、昭和46年は10月に調査したため、それ以後の7月調査の資料と比較した場合、日照時間等の関係で、屋外遊び時間が短くなっている)。

図4. 平日の屋外遊び時間の地域別経年比較
(昭和55年の各地域間には有意差なし)

図4および高橋・丹羽の研究²⁰⁾では、明らかに屋外遊び時間は住宅<過密<農村という関係が

成立していた。その理由を明らかにするため、遊び場、遊び仲間、塾やけいこごとに通う率やその内容(図5)の分析が行なわれたが、遊び場の豊かさ、仲間の人数、遊びに対する親の意識が大きく影響していることが指摘された²⁰⁾。そして特に、塾参加率と屋外遊び時間が密接に関係していると考えられてきたので、地域差に関わるこの屋外遊び時間と塾参加率との関係を見ると、表2から、塾への参加率に地域差がなくなり、図4から屋外遊び時間の地域差もなくなったことがわかる。

なお、図5・6は昭和46・55年の地域別にみた塾・けいこごとへの参加内容(種目)を示している。塾等への参加率には地域差がなくなったが(表2)、地域別にみた塾などへの参加内容は従来と同様の傾向を示している。すなわち、実用的内容(種目)には農村や商業・過密地域の参加が多く、知的内容(種目)には住宅地域の児童の参加率が高い(但し、文化・教養的内容については地域差がなくなっている)。

以上、地域別に塾参加率と屋外遊び時間の関係をみてきたが、塾参加率(時間的要因)が屋外遊び時間と密接に関係していることが推定される。こうしたことから屋外遊び時間を規定する要因と

図6. 塾・けいこごとへの参加内容(地区別, %) (昭和55年)

注) 1. %は実際の参加率を示したものである。

2. 知的内容：学習塾，家庭教師
実用的内容：そろばん，習字
文化・教養的内容：音楽，おどり，パレー，スポーツクラブなど
3. 二つ以上選択している内容もあるので(M. A.)，100%を越える場合もある。

表2 塾・けいこごとへの参加率 (%)

調査年 地域	昭和46年	昭和55年
住宅	79.7	80.0
商業過密	68.4	80.6
団地	64.3	—
農村	47.8	79.9
全体	65.0	80.1

図5. 塾・けいこごとへの参加内容(地区別, %) (昭和46年)

注) 1. %は実際の参加率を示したものである。

2. 知的内容：学習塾，家庭教師
実用的内容：そろばん，習字
文化・教養的内容：音楽，おどり，パレー，スポーツクラブなど

して、時間的要因が強い影響力をもつことが考えられる。

2. 屋外遊び時間と他の生活時間との関係

- 1) 現実の屋外遊び時間と希望する屋外遊び時間の比較

図7, 8に, 現実の屋外遊び時間と「平日, じゅうぶん満足するまで家の外で遊ぶにはどのくらいの時間がほしいか」と尋ねた時の希望する遊び時間を示した。

図7. 現実の屋外遊び時間と希望する屋外遊び時間の経年比較(平日, 全対象)

図8. 現実の屋外遊び時間と希望する屋外遊び時間の経年比較(全対象・塾のない日)

注) 子どもの自由時間の多い日の屋外遊び時間を見るため, 塾のない日をとって比較している。

どの年でみても現実と希望する屋外遊び時間が異なり(図7), 男女差が認められる(図8)。例えば, 昭和55年の全対象(平日)でみると(図7), 現実と希望時間に約2時間のギャップがあり, このギャップこそ種々の制約による影響を示唆しているものと思われる。

2) 屋外遊び時間と他の生活活動時間との関係の経年比較

屋外遊び時間と他の生活時間との関係を昭和46年と55年についてみたのが表3・4である。(紙面の都合で二つの年について示す)

表3・4から屋外遊び時間と屋内遊び時間, TV視聴時間との相互関係をみると, 例えば, 平日2時間以上屋外で遊んでいる児童は, 1時間以下しか遊ばない児童に比べて, 屋内遊び, TV視聴時間ともに多く, また, 基準を屋内遊び, TV視聴時間の多少に変えてみても同様の傾向が認められる。すなわち, 遊びへの志向性の強い児童は, 家の外でも, 中でもよく遊び, テレビもよく見ていることがわかる。

「屋外遊び時間と屋内遊び時間, TV視聴時間とが, 同調的である」という傾向は, 48年²⁰⁾, 56年⁶⁾⁷⁾の調査結果とも一致している。一方, 46年の調査で屋外遊び時間と対立的な関係を示した「学習時間」については, 48年²⁰⁾, 56年⁶⁾¹²⁾, 57年⁷⁾の調査でも小学校高学年で同様の傾向がみられた。注目すべきことは, 従来の「テレビを見るから外で遊ばない」という考えを部分的に否定する結果が得られたことである。すなわち, TV視聴時間の分だけ, 屋外遊び時間を含んだ生活活動時間を減少させることはその通りであるが, 生活活動時間を相対的に見る限り, 屋外遊び時間の多い児童はTVもよくみており, 「TVをみている児童は外で遊ばない」ということは必ずしもあてはまらない。

3) 屋外遊び時間と塾・けいこごとと参加との関係の経年比較

前述したように屋外遊び時間と塾・けいこごとへの参加とは密接に関係しているので, この点を検討する。

塾・けいこごとの参加率を図9に示す。図9から年を追って参加者の割合が増え, 55年では参加率が80%に達し, 5・6年児童の5人の内4人までが何かの塾・けいこごとに参加していることがわかる。そこで, 昭和55年の塾・けいこごとの参加の有無と屋外遊び時間との関係を表5に示す。表5から, 屋外遊び時間は, 塾・けいこごとへの参加者の方が非参加者よりも明らかに少ない。また表3・4(最右欄)から, 塾等への参加者は非参加者よりも屋外遊び, 屋内遊び, TV視聴時間

表3. 平日の生活活動時間の相互関係 (昭和55年7月調査)

(単位は時間:分)

基準 生活活動時間	屋外遊び時間		屋内遊び時間		T.V.視聴時間		塾・けいこごと	
	1:00以下	2:00以上	1:00以下	2:00以上	1:00以下	4:00以上	非参加	参加
N %	272人 20.9%	684人 52.5%	757人 57.5%	245人 18.8%	332人 24.7%	154人 11.8%	259人 19.9%	1044人 80.1%
屋外遊び時間			1:58<2:21 ***		1:47<2:24 ***		2:21>2:00 ***	
屋内遊び時間	1:04<1:17 ***				0:53<1:29 ***		1:24>1:07 ***	
T.V.視聴時間	1:57<2:19 ***		1:55<2:45 ***				2:38>2:01 ***	
塾等参加の割合	80.9%	76.5%	82.8%	68.6%	88.5%	66.9%		

注) (1) 屋内遊び時間は、T.V.視聴時間を除く (2) 不等号は時間の多少 (3) *** P<.001

表4. 平日の生活活動時間の相互関係 (昭和46年10月調査)

(単位は時間:分)

基準 生活活動時間	屋外遊び時間		屋内遊び時間		T.V.視聴時間		学習時間		塾・けいこごとへの参加	
	1:00以下	2:00以上	1:00以下	2:00以上	1:00以下	4:00以上	1:00以下	2:00以上	非参加	参加
N	537	258	646	207	213	196	546	260	308	684
屋外遊び時間			1:24<1:46 ***		1:18<2:06 ***		1:42>1:14 ***		1:14>1:25 ***	
屋内遊び時間	1:13<1:35 ***				54<1:53 ***		1:25≒1:16		1:27>1:18 *	
T.V.視聴時間	2:26<2:42 **		2:32<3:17 ***				2:58>2:16 ***		2:58>2:35 ***	
学習時間	1:40>1:10 ***		1:35≒1:29		1:53>1:19 ***				1:27≒1:31	
塾等参加の割合	72.7%	58.5%	71.8%	63.5%	78.3%	57.9%	65.0%	73.5%		

注) 有意水準は*P<.05, **P<.01, ***P<.001を示す。

*** p<.001 ** p<.01

図9. 塾・けいこごとへの参加率(%)

の全ての遊び時間が少なかった。前述の表2. 図4から導いた推論などとあわせて考えると、塾等への参加が児童の自由時間全体の減少に深く関係していることがわかるが、この傾向は昭和48年²⁰⁾、55年⁶⁾、56年⁷⁾の調査でも共通してみられる。

また図10に示したように、塾参加者の屋外遊び

表5. 塾・けいこごとへの参加の有無と屋外遊び時間との関係(単位:分) (昭和55年)

	参加の有無	参加者	非参加者
屋外遊び時間	平日 有意水準	120 < 141 (p < .001)	
	土曜日 有意水準	182 < 227 (p < .001)	
	日曜日 有意水準	277 < 298 (p < .001)	

時間は、塾に行く日と行かない日では1日に約1時間の差がみられ、塾参加が直接屋外遊び時間の減少につながっていることがわかる。また、塾参加者は塾に通っているために遊べない時間を塾に通わない日に補っていると考えられる。しかし、屋外遊び時間全体は年を追って少なくなる傾向が

図10 塾参加の有無別にみた屋外遊び時間

みられる。このように塾通いによって屋外遊び時間が全体的に減少していることがわかるが、これは遊び時間の減少だけではなく、遊び集団の成立、持続とも関係している¹²⁾。

しかし、塾参加者の考え方を図11からみると、「遊びより塾の方が大切」だとする児童の割合は、48年と比較すると55、56年の方が減少しており、反面「友だちがいてそこで遊べるので楽しい」「もっと遊びたいので本当はやめたい」と答える児童が増加している。このように児童の塾・けいこごとに対する考え方には変化が認められる。大阪府下の児童にとって塾等への参加はもはや一般的現象であるが、そこには勉強やけいこ場以外に仲間が集まる一種の遊び場、社交の場的性質も加わってきていると考えられる。

図11. 塾参加児童の塾への考え方

3. 屋外遊び時間と遊び仲間との関係

1) 屋外遊び時間と近所の遊び仲間の富裕意識

屋外遊び時間と近所の遊び仲間の富裕意識を図12、13(昭和48年、56年)に示す。48、56年いずれにおいても近所に仲間が多くいると感じている児童ほど屋外で長時間遊ぶ傾向がみられ、屋外遊び時間の多少と近所の遊び仲間の富裕意識には密接な関係が認められる。

		屋外遊び時間の多少		
近所の友人数	少ない	44.9	ふつう	41.1
	多い	14.0	ふつう	52.4
	多い	23.8	ふつう	50.8

($p < .01$)

図12. 屋外遊び時間の多少と近所の遊び仲間の富裕意識 (%) (平日) (昭和48年)

		屋外遊び時間の多少		
近所の友人数	少ない	58.7	ふつう	24.6
	多い	16.7	ふつう	31.7
	多い	36.8	ふつう	33.7

($p < .01$)

図13. 屋外遊び時間の多少と近所の遊び仲間の富裕意識 (%) (平日) (昭和56年)

2) 屋外遊び時間と遊び集団員数

昭和55年の屋外遊び時間と遊び集団員数との関係を図14に示す。図14では、集団員数が多く

		屋外遊び時間の多少		
成員数	1人	43.5	普通	36.1
	2~3	28.2	普通	46.5
	4~5	19.7	普通	44.4

($p < .001$)

図14. 遊戯集団員数と屋外遊び時間との関係(平日) (%) (昭和55年)

なるほど屋外で長時間遊ぶ児童の比率が増加する傾向がみられる ($p<.001$)。この傾向は各曜日とも共通し¹²⁾、また46, 48年²⁰⁾の調査結果とも一致する。ただし、昭和55年の資料では成員数間のt検定の結果、1人と2～3人の間に $p<.016$ 、2～3人と4～5人の間には $p<.001$ で有意差がみられたが、4～5人と6人以上の間には有意差がないことから、4～5人以上の場合は、それ以上増えても屋外遊び時間に大きな変化はないと思われる。

昭和56年の調査(表6)から見ると、全体の約60%が3人以下で遊んでおり、集団成員数を基準として屋外遊び時間をみると、1人68分、2～3人92分、4人以上107分となり、以前の調査結果と同じく、集団成員数が多いほど屋外遊び時間も多くなる傾向がみられる。従来の研究によると、集団成員数が多くなるとチームゲームの要素が加わるので遊びが活発になり、没入度も高くなり、その結果、遊び時間も長くなる²⁰⁾と考えられる。

以上のことから、遊び集団の成員数が屋外遊び時間の長さや密接な関係にあることがわかる。

表6 遊戯集団成員数と屋外遊び時間の平均(昭和56年)

	1人	2～3人	4人以上
N(%)	47 (6.4)	396 (53.5)	297 (40.1)
$\bar{X}$ (分)	67.6	91.9	107.1
有意水準	$\begin{array}{c} \text{0.013} * \quad \text{0.003} ** \\ \text{0.001} *** \end{array}$		

4. 屋外遊び時間と遊び場との関係

遊びを規定する要因として、時間的要因、仲間の要因と共に空間的要因もまた重要である。そこで、児童が感じた「遊び場の数」と屋外遊び時間との関係をみたのが図15である。なお図中の遊び

ほとんど あまりない	少ない 50.2	ふつう 30.6	多い 19.2
ふつう	41.8	31.3	26.9
かなり たくさんある	40.0	34.2	25.8

($p<.05$)

図15 遊び場の富裕度と屋外遊び時間(%) (昭和56年)

時間の多い少ないは、屋外遊び時間の標準偏差をもとに平均から $\pm 1\sigma$ 以内を普通とし、それ以上を多い、それ以下を少ないとして、各%を示している。図15から、遊び場を多く持っていると感じている児童は、遊び場が少ないと感じている児童より長く外で遊ぶ傾向がみられる。同様の傾向は昭和48年²⁰⁾、55年⁶⁾の調査でもみられる。

5. 屋外遊び時間と児童の主体的要因との関係

1) 屋外遊び時間と遊びへの志向態度

児童の遊びに対する意識から、雨でない日「家の外でよく遊ぶ」(外型)、「家の内でよく遊ぶ」(内型)、「どちらも遊ばない」(否定型)の三つの志向態度に分類した。

図16に示すように、外型(約半数)>内型(約30%)>否定型のパターンは、どの調査年においてもほぼ共通している。また、屋外遊び時間と遊びへの志向態度についてみると(図17, 昭和56年)屋外遊び時間は、外型>内型≒否定型のパターンがあり、屋外遊び志向の強い児童は、屋内遊び志向、遊び否定型の児童より、屋外でよく遊ぶ傾向がみられる(約40分)。

	外型	内型	否定型	
昭和46年	46.6	32.9	20.5	$p<.001$
昭和48年	54.1	31.3	14.5	$p<.001$
昭和55年	58.7	27.6	13.7	$p<.001$
昭和56年	53.9	28.8	17.3	$p<.001$

図16 遊びへの志向態度の経年比較(%)

図17 遊びへの志向態度と屋外遊び時間(昭和56年)

2) 屋外遊び時間と健康や運動技能に対する自己評価

昭和56年の屋外遊び時間と児童の意識からみた健康度や運動技能度の自己評価を図18, 19に示す。図18より「健康度」意識と屋外遊び時間との間には明確な関係は認められない。図19より「運動技能度」意識と屋外遊び時間との関係についてみると、運動が上手と考えている児童に屋外遊び時間が多い傾向がみられる。

屋外遊び時間の多少			
健康度	弱い (53)	少ない 43.4	ふつう 35.8
	ふつう (603)	47.4	30.3
	丈夫 (266)	44.7	32.3

(n.s.)

図18 屋外遊び時間の多少と自己評価による健康度(%) (昭和56年)

6. 屋外で遊ばない理由

次に、「家の外であまり遊ばない」児童について、外で遊ばない理由を尋ねた結果を検討する。遊ばない理由について昭和46, 48, 55, 56年の資料を表7に示す。表7から、「あまり遊びたくない」が一貫して大きな理由としてあがっている。子どもは本来、遊びに対して積極的な意欲をもつと一般に考えられているが、遊ぶための時間、空間、仲間がなく、さらに受験や危険な道路という状況

屋外遊び時間の多少			
運動技能	下手 (126)	少ない 57.1	ふつう 31.7
	ふつう (600)	45.8	30.5
	上手 (175)	40.6	33.7

($p<.01$)

図19 屋外遊び時間の多少と自己評価による運動技能度(%) (昭和56年)

表7 家の外で遊ばない理由

昭和46年			昭和48年			昭和55年			昭和56年		
順位	項目	%	順位	項目	%	順位	項目	%	順位	項目	%
1	あまり遊びたくない	48.1	1	あまり遊びたくない	47.8	1	あまり遊びたくない	37.5	1	遊び相手がいない	33.8
2	遊び相手がいない	27.2	2	宿題・勉強が忙がしい	31.9	2	遊び場がない	26.4	2	遊び場がない	32.7
2	塾・おけいごと・家庭教師	27.2	3	テレビがおもしろい	28.8	3	家の外で遊んでもおもしろくない	25.5	3	あまり遊びたくない	30.3
4	テレビの方が楽しい	26.7	4	遊び場がない	28.1	4	遊び相手がいない	25.3	4	テレビがおもしろい	26.9
5	宿題・勉強が忙がしい	19.5	5	遊び相手がいない	24.6	5	テレビがおもしろい	21.4	5	家の外で遊んでもおもしろくない	25.1
6	遊び場がない	18.5	6	家の外で遊んでもおもしろくない	21.5	6	宿題・勉強が忙がしい	18.4	6	塾・おけいごと・家庭教師	23.2
7	遊び道具がない	10.8	7	塾・おけいごと・家庭教師	13.0	7	塾・おけいごと・家庭教師	17.5	7	宿題・勉強が忙がしい	23.0
8	家の人が反対する	4.1	8	外で遊ぶと疲れる	10.6	8	遊び道具がない	10.2	8	遊び道具がない	12.7
			9	遊び道具がない	9.9	9	家の人がいろいろ言う	8.2	9	外で遊ぶと疲れる	10.6
			10	家の人がいろいろ言う	7.6	10	家の手伝い、留守番	7.2	10	家の人がいろいろ言う	9.5
			11	家の手伝い、留守番	6.6	11	外で遊ぶと疲れる	6.1	11	家の手伝い、留守番	7.1
			12	空気が悪い	5.4	12	空気が悪い	0.9	12	外で遊ぶと危ない	4.0
									13	空気が悪い	1.1
	その他	0.5								その他	7.1

下では遊びに否定的にならざるを得ない母親の態度などから、子どもは遊びたくても遊べない状態にあり、それらが複合して次第に遊びに対する意欲を喪失しつつあると考えられる。また、昔から行われてきた子どもたち独自の未組織な遊びが崩壊し、児童の遊戯文化の質的変容がおこり、屋外遊びの魅力が減少していることなども理由として考えられる。しかし根本的には、遊びたいと思っても、その欲求を満たすことができない厳しい状況によりよく適応するため、無意識のうちに遊ぶ意欲を抑圧しはじめているのではないかと考えられる。この根本的な理由の解明は今後の大きな課題として残されているが、いずれにせよ、昔から子どもは遊びによって発達し、人間らしくなってきたはずであったが、このように遊びたくない児童が多く出現したということは、最近の現象であり、一種の社会病理現象と考えられる。

次に遊び仲間がいまいちということも大きな理由としてあがっている。前述したように、外遊び時間は仲間と密接に関係しているが、やはり仲間は児童の意識においても屋外で遊ぶ場合の大きな要因となっている。近年の傾向である子どもの数の減少、塾通いの一般化等による遊び集団成立の困難性は、こうした意味でも重要な問題である。また、勉強や塾等の理由（時間的理由）によるものは、合計すると非常に大きな割合を占めることはいうまでもない。場所的要因については、昭和46年では18.5%で5位であったが、昭和56年では32.7%で2位になっている。10年間で遊び空間が、外遊びに影響する位縮小されたことを示唆している。

結 論

昭和46年10月、48、55、56年7月に大阪府下の小学校5・6年生各約1,200名、合計約5,000名を対象に「遊びの調査」を実施した。そして、児童の屋外遊び、特に遊び時間を中心に経年比較を行い、さらに屋外遊び時間を規定する要因を検討した結果、次の結論を得た。

1. 大阪府下の小学校高学年児童の屋外遊び時間は、10年前と比較して次第に減少している。

2. 性別では、男子が女子より平均して常に長く外で遊んでいる。屋外遊び時間に関する地域差は、屋外遊び時間を規定する時間、空間、仲間等の要因に強く依存していると考えられる。
3. 児童の希望する屋外遊び時間と現実のそれとの間には差がある（昭和55年では約2時間）。この差こそ屋外遊びの種々の制約を示唆するものと考えられる。
4. 屋外遊び時間と屋内遊び時間、TV視聴時間とは同調関係にある。
5. 調査対象児童の塾・けいこごとへの参加率は年々増加し、昭和55年には平均80%にも達し、塾・けいこごとへの参加が、児童の遊び時間（屋外、屋内、TV視聴）全体を圧迫している。したがって屋外遊び時間量は、塾・けいこごとへの参加者の方が、非参加者よりも明らかに少ない。
6. 遊び仲間（富裕意識と成員数）が多くなるほど屋外遊び時間量が増加する傾向が見られ、両者に密接な関係が認められる。
7. 広い遊び場や多くの遊び場をもっていると感じている児童は、狭い、少ない遊び場しかないと感じている児童より、屋外で長く遊ぶ傾向がみられる。
8. 屋外遊び志向の強い児童は、屋内遊び志向及び遊び否定型の児童より長時間屋外で遊ぶ傾向がみられる。しかし、自己評価による健康度と屋外遊び時間の多少には強い関係はみられない。
9. 屋内遊び志向型及び遊び否定型の児童の「屋外で遊ばない理由」は、勉強・仲間・遊び場等の外的な規制が複合して影響し、児童に「あまり遊びたくない」という内的規制を生んでいることが最も大きいと考えられる。
10. 屋外遊び時間を規定する要因として、時間、空間、仲間、主体の4要因を設定したが、それぞれの要因が屋外遊び時間を規定していることが認められた。特に時間（塾・けいこごとへの参加）、仲間、主体的態度（特に遊ぶ意欲）の三要因の強い規定力が認められる。

引用文献

- 1) 藤本浩之輔, 子どもの遊び空間, 日本放送出版協会 (NHKブックス204), 1974. Pp.245
- 2) 深谷昌志, 深谷和子, 遊びと勉強, 中央公論社 (中公新書 434), 1976. Pp. 182.
- 3) 一地ヶ瀬康子, 泉順, 小川信子, 窪田暁子, 穴戸健夫, 子どもの生活圏, 日本放送出版協会 (NHKブックス86), 1969, Pp.243.
- 4) 池田秀男, 山橋澄子, 子どもの生活と遊びに関する調査研究, 徳島大学教育学部学芸紀要 (教育科学), 第20巻, 7-31, 1971.
- 5) 井上健治, 子どもの生活時間と遊び(1), 東京大学教育学部紀要, 第13巻, 1-30, 1973.
- 6) 入口豊, 高橋健夫, 丹羽劭昭, 白銀茂夫, 長沢邦子, 児童の遊びの比較研究(1), 日本体育学会第32回大会号, 191, 1981.
- 7) 入口豊, 丹羽劭昭, 高橋健夫, 白銀茂夫, 長沢邦子, 児童の屋外遊びの比較研究(3), 日本体育学会第33回大会号, 167, 1982.
- 8) 神保信一, 深沢紀子, 子供の遊び場についての研究 — 過密都市における遊び場の実態と理想, 明治学院論叢222号, 1-31, 1974.
- 9) 神保信一, 深沢紀子, 子供の遊び場についての研究(Ⅱ) — 過密都市における児童公園の検討: 明治学院論叢237号, 25-42, 1976.
- 10) 加藤隆勝, 現代っ子 — その生活と価値意識, 大日本図書, 1974. pp. 73-111.
- 11) 丹羽劭昭, 村松洋子, 女子大生のスポーツ参加の動機に関する因子分析的研究, 体育学研究, 24: 1, 25-38, 1979.
- 12) 丹羽劭昭, 高橋健夫, 入口豊, 白銀茂夫, 長沢邦子, 児童の遊びの比較研究(2), 日本体育学会第32回大会号. 192, 1981.
- 13) 丹羽劭昭, 高橋健夫, 入口豊, 白銀茂夫, 長沢邦子, 児童の遊びの比較研究(4), 日本体育学会第33回大会号, 168, 1982.
- 14) 丹羽劭昭, 高橋健夫, 入口豊, 白銀茂夫, 長沢邦子, 児童の屋外遊びを規定する要因の検討, 日本体育学会第34回大会号, 143, 1983.
- 15) 丹羽劭昭, 長沢邦子, 高橋健夫, 入口豊, 児童の屋外遊びを規定する要因の検討 — 児童の遊びや生活に対する母親の態度を中心に —, スポーツ教育学研究, 3: 2, 29-47, 1984.
- 16) NHK放送世論調査所, 日本人の生活時間, 日本放送出版協会, 1980, pp. 173-219.
- 17) NHK放送世論調査所編, 日本の子どもたち — 生活と意識, 日本放送出版協会, 1980, pp.13-68.
- 18) 大阪府教育委員会, 児童の遊びに関する調査報告, 大阪府教育委員会保健体育研究報告集, No. 1, 1972. Pp. 66, No. 2, 1974. Pp. 119.
- 19) 千石保, 飯長喜一郎, 日本の小学生 — 国際比較でみる, 日本放送出版協会 (NHKブックス357), 1979. pp. 77-108.
- 20) 高橋健夫, 丹羽劭昭, 児童の屋外遊戯時間に及ぼす社会的要因, 体育社会学研究 3, 227-263, 1974.